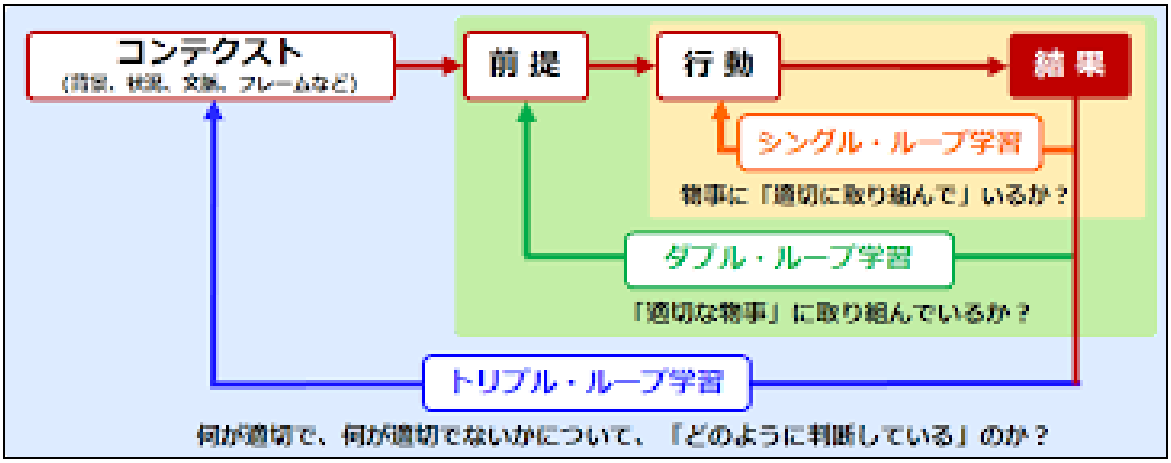
未来創造志塾　19期第7回（2020．11．9）

チェックイン

米大統領選挙から見える「世界観」―――共和党と民主党の違いとは？
「鬼滅の刃」大流行と「嵐フェス」の対比（パワーシフト＝情報の発信者）

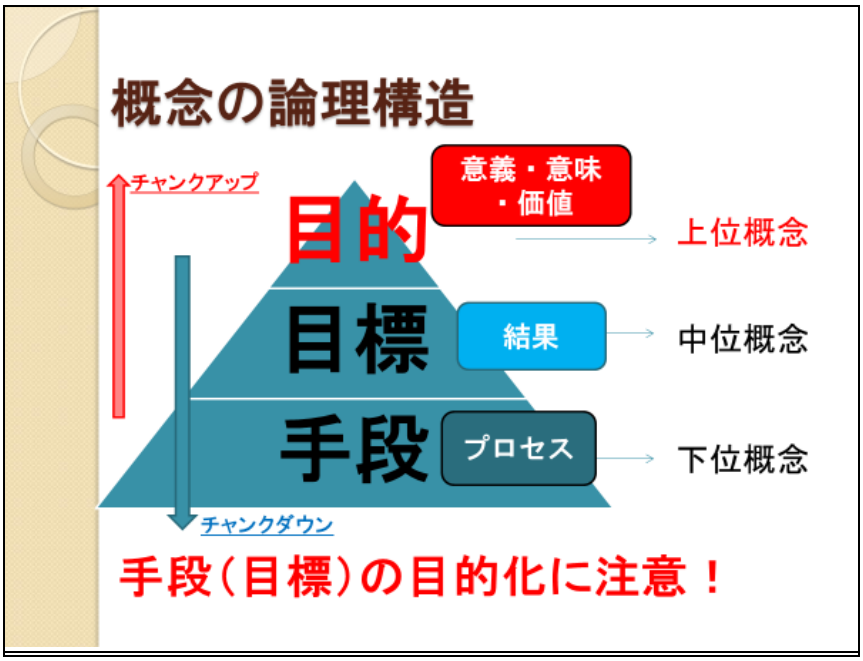
「地政学」から見るアメリカ・中国との関係、そして日本の未来のあり方
・時間＝歴史学、空間＝地政学→→→視点の転換（パラダイムシフト）
・ランドパワー（陸軍）とシーパワー（海軍）の戦略の違い
・米の世界観「新世界 vs 旧世界」「共和党 vs 民主党」「モンロー主義」
　人間はみな平等な権利を持っている（生命・自由・幸福追求）善悪二分論
・中国と日本・台湾・東南アジアの関係とシーパワーの戦略
・中国の対日本超限戦略（スパイ）、中国の対アジア戦略（鉄道・河川）

システム思考



概念の論理構造――――　一度、抽象化してから、自社ではどう具体的行動するか？

目的・目標達成するのはなぜか？―――必要な優先順位をつける為に自己管理する。
……高い価値観の判断軸で（相手本位・未来本位・内容本位・逆境本位）



統合の思想に基づく21世紀の企業経営（154p～）

参考テキスト(出典):企業再構築の仕掛け　バリュー･マネジメント　竹内日祥　現代書林 2006 年 6 月

能力:客観的合理性････個人主義者････分離思考＝客観的(分析)目標達成･･･能力･技術が必要
思想:主体的責任性････共同体主義････統合思考＝主体的(洞察)目的達成･･･思想･哲学が必要

人間の思考模式	
自我人格	自己人格
仮面をつける自分	素顔、真顔の自分
部分的、自己主張の思考	全体的、自他共存の思考
客観的、合理的思考	主体的、関係的思考
分離的自我	統合的自己

「統合の思想」と企業経営の関係性(154p)

低い思想「分離思想」	高い思想「統合思想」
自己と他者、敵と味方が明確に分かれてしまう お互いの権利の主張がエスカレート！	敵が味方に変わる！ 悪を善に変える！　醜い世界が美しい世界に！
「主観」と「客観」を分離	「主観」と「客観」を統合
機械論的思想	有機体的思想

参考資料＝複雑系の市場論（2 期 8 回未来創造志塾　2003 年 12 月）

・「複雑なものには、いのちが宿る」⇒⇒創発性⇒⇒集団心理⇒⇒ディファクトスタンダート
・「神の見えざる手」⇒⇒自己組織性、自己創造性
・「商品生態系」パッケージ商品・トータルサービス・オールインワン商品・ワンストップ商品
・目に見えない市場競争
・自己組織化⇒⇒散逸構造理論（イリヤ・プリモジン）
　「ひとたび起こったことが、ふたたび起こりやすくなる」ゲーム機、VHS、ウインドーズ
　　情報共有から情報共鳴へ⇒⇒⇒創発性

ネット革命の本質を見つめる

3 つの革命

① 情報バリアフリー革命
② 草の根メディア革命
③ ナレッジ共有革命

「顧客中心市場」が生まれてくる！
ＡＩ「アフター・インターネット」……　ＢＩとは決定的に違う
➠➠➠「ニューミドルマン」（新中間業者）が資本主義を進化させる。

統合と融合には、本質的な違いがある(159p)
「統合」
「融合」
「総合」
「統一」
　⇒⇒⇒この違いがわかるか？

未来創造志塾　19期第6回（2020．10．12）

ビジネスに効く中国古典　「韓非子」性悪説の帝王学

17期4回　韓非子講義解説より

法家思想「法」「術」「勢」→→→秦の統一

賞罰規定としての「法」
人は利害で動く。
「うなぎは蛇に似ているし、蚕は芋虫にそっくりだ。・・・・・」（112p）
「聖人が政治の手段として使うものが三つある。1つは恩賞、二つ目は厳罰、三つ目は名誉だ。
「民が名誉を激しく求めるさまは、恩賞を求めるよりも甚だしい。」

人は利で動く（韓非子：備内編）
⇒人間を動かしている動機は何か？
名誉でもない、正義でもない、ただ一つ利益である！と韓非子は言う。

忠誠を当てにするな（韓非子：外儲説編）
⇒臣下が背かないことに期待をかけるな。背こうにも背けない態勢をつくれ。
そこで必要になるのが「術」である
① ごまかしを許さない厳格な勤務評定
② 賞罰の権限をみずから行使する
⇒権力の要をしっかり握り、黙って睨みを利かせる

君主は権限を手放すな！（君主は、二本の操縦桿によって臣下を統制する）114p
明主の導ってその臣を制する所のものは、二柄のみ（韓非子：二柄篇）
⇒すぐれた明君は賞を与え、罰を科す権限を臣下に渡さない
厳刑重罰は民の悪む所なり、而れども国の治まる所以なり
百姓を哀憐し、刑罰を軽くするは、民の喜ぶ所なり、しかれども国の危うき所以なり。
⇒刑罰は平等・透明・・・厳刑をためらうな！
評価は公平・透明にする

恩賞を与え、名誉をさずけてもその気にならない。逆に罰を加え、不名誉に落としても恐れない。
このように四つの要素を加えても変わらない者は、これを除いてしまう。（121p）
→成果が上がる組織とは？
君主は、二本の操縦桿によって臣下を統制する　160p
二本の操縦桿とは「刑」と「徳」のことだ。では、「刑」と「徳」とは何か。殺戮を刑といい、賞を徳という。
部下というのは罰を恐れ賞を喜ぶのが常である。だからトップが罰と賞との二つの権限を握っていれば、ふるえあがらせたり、てなづけたりして、思いのままに操ることができる。（韓非子：二柄篇）
⇒すぐれた明君は賞を与え、罰を科す権限を臣下に渡さない
事例
心理＝マズローの5段階の欲求

地政学 ① 中国の地政学的戦略

とになる。

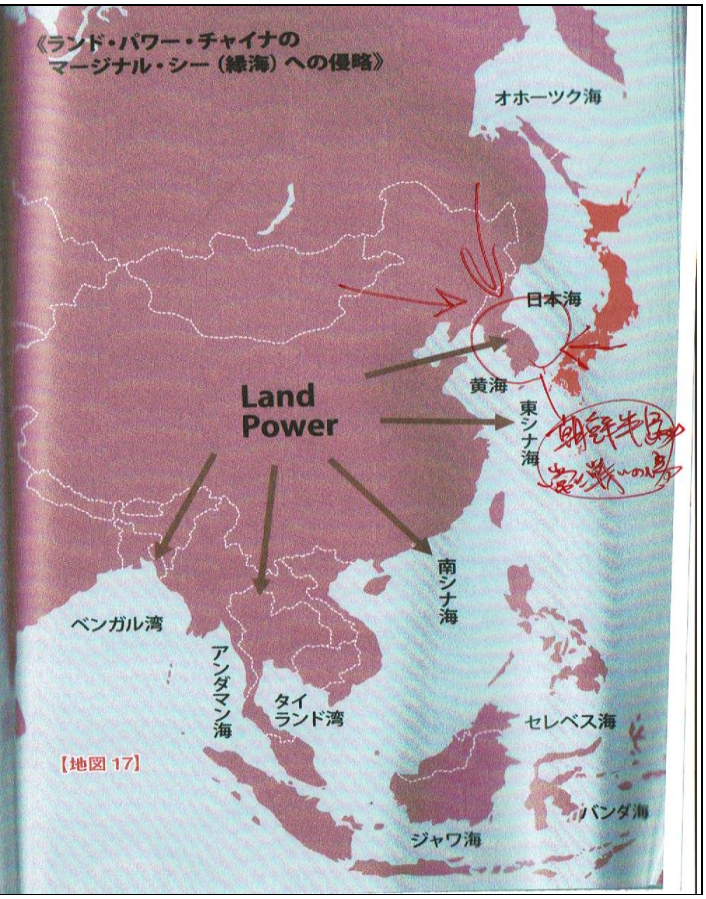
朝鮮半島を舞台とした朝鮮戦争や、インドシナ半島を舞台としたベトナム戦争は、まさにこの典型的なランド・パワー（ソ連）対シー・パワー（アメリカ）の戦いであった。同時にこれは代理戦争でもあった。ちなみに、帝政ロシアの時代に朝鮮半島制圧を目論んだロシアは、日露戦争によって日本にその野望を挫かれた。朝鮮戦争は、ロシアにとって半島制圧の第２回目の試みであったのだ。日本敗退後、この朝鮮半島の南半分に進出してきた新興シー・パワーたるアメリカとの第２回戦（セカンドラウンド）である。そして、その結果は引き分（ドロー）けであった。

朝鮮半島は伝統的にチャイナ（ランド・パワー）の勢力圏であり、チャイナはここを1000年以上にわたって支配していた。2016年の今再び、南北朝鮮ともチャイナの勢力圏に入りそうな勢いである。韓国のパク・クネ政権は、あまりにチャイナに近づき、媚びるような外交を展開している。同盟国アメリカもあきれるばかりだ。むしろ北朝鮮が北京の指導者に反抗している。

力が復活してくれば、ロシアも半島支配に３度、野望を抱くかもしれない。**朝鮮半島は、米ロ中３大国の力がぶつかり合うリム・ランド（大陸周辺）なのである。**現在では、ロシアの力はまだまだ弱いので、米中新冷戦が深刻化している。そしてこの米中対決が最もよく表れているのが、朝鮮半島と南シナ海なのである。

ベトナム戦争と朝鮮戦争の違いは、北ベトナムのほうが（北朝鮮よりも）ソ連に対して主体性を保ち、民族解放戦争としての性質が濃厚だったことである。北ベトナムからすれば、ソ連の地政学的野望を利用して、民族統一を成しとげた、とも言えるだろう。

《ランド・パワー・チャイナのマージナル・シー（縁海）への侵略》



【地図 17】

最強兵器としての地政学 ② 中国の日本、台湾侵略

◆台湾防衛の意義

次ページの【地図 20】を見て欲しい。

日本にとって、東シナ海、南シナ海は、今一番大事な焦点になっている海域である。その両方のマージナル・シーの結節点が台湾なのである。台湾には、ご存知の通り玉山（昔の新高山）という富士山よりも高い山があり、南シナ海全域を見下ろすことができる。高い場所にレーダーを設置すれば、南シナ海全部をカバーでき、そこにミサイルの発射台を設置すれば、非常に簡単に南シナ海全体を睥睨して、コントロール下に治めることができるのだ。だからチャイナは戦略的に台湾が欲しくてたまらないのである。

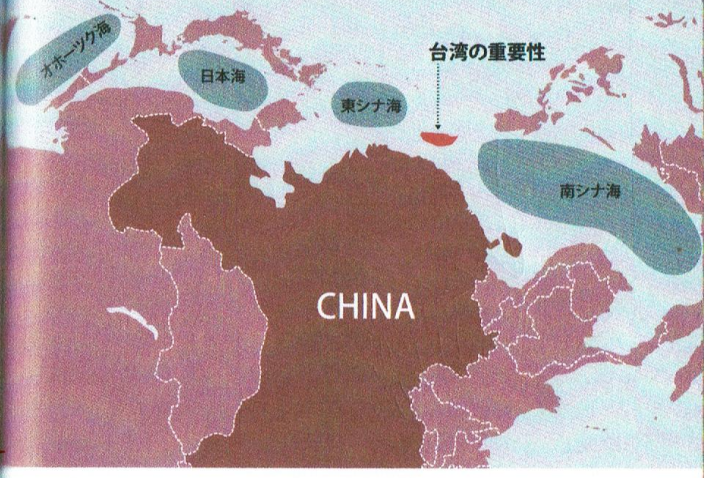
逆に台湾を日本やアメリカが友邦、同盟国としておくかぎりにおいては、チャイナが東シナ海、南シナ海を制圧することは非常に難しい。台湾は、まさに「不沈空母」なのである。

2016年１月の総統選挙で、台湾の人たちは、蔡英文女史を新総統に選んで、「大陸に併合統一されたくない。やはり独立建国の道を歩むんだ」という決意を世界に示した。これは実に立派な決断である。台湾は、輸出の４割ぐらいがチャイナ向けで、国のＧＤＰを超える額を既にチャイナに投資してしまっているのだ。だからこの決断によって、大陸からの圧力が強まることはわかっている。

しかし、前の馬英九政権の方向へいけば未来はない、香港の二の舞になるということがはっきりしたので、チャイナからの圧力は承知の上で、この勇気ある決断を下したのである。

台湾は世界一の親日国ともいわれているので、我々日本もなんとかして台湾を助けなければならない。台湾人自身は、自立・独立の方向へ行こうと決断した。それを助けることができるのは、やはり日本やアメリカなどの強い国なのだ。逆にいうと台湾をチャイナに獲られれば、東シナ海、南シナ海という二つのシナ海をも獲られてしまうのである。日本やアメリカも台湾と同じ覚悟を持って、台湾を助けなければならないのだ。

《ランド・パワー・チャイナを抑えこむ日本と台湾》【地図 20】



では、台湾をどう助ければよいのか。台湾を守ることはそう難しいことではない。ここでアナロジー（類推）が出てくる。**地政学は、地図の見方であると同時にアナロジーの学問でもある。**

まず日露戦争の時のことを考えてみよう。ロシアというランド・パワーの大国に、日本というシー・パワーの小国が圧迫を受けて

ランドパワーに対するシーパワー防衛策 ③

【チャート06】

Land Power に対するリムランド（大陸周辺列島国家）Sea Power 防衛の鉄則

①航空優勢 ⇒ 海上優勢 ⇒ 占領不能
（Air Superiority）（Sea Superiority）

②後背地（補給基地）の必要

③不屈の忍耐心と独立心

⇕

中国共産党の「超限戦」＝心理戦

◆チャイナの日本に対する「超限戦」

【チャート05】のアナロジーを基本に、ランド・パワーに対するリム・ランドのシー・パワーが行うべき防衛策を考えてみよう。大陸周辺の列島国家または島嶼国家といういいかたもするが、これに該当するのが日本であり、イギリスであり、台湾である。

【チャート06】を参照していただきたい。

我々も含むこれらの国が、ランド・パワーからの圧迫を受けた場合、まず第一に航空優勢をはずさない。航空優勢・海上優勢があれば絶対に占領上陸は不可能である。第二に後背地、補給基地は絶対に持たなければならない。あとは、言うまでもなくスピリッツ、不屈の忍耐心である。

スパイ大作戦

これらに対してチャイナは「超限戦」という方法で侵略してくる。超限戦は、あらゆる人間活動が戦場になるという考え方である。すなわち戦場における戦闘だけではなくして、情報、金融、経済、貿易をすべて戦争に勝つための戦場として利用するのである。あるいは個人的な友情関係までもすべて、勝つために利用するのである。わかりやすくいうと、戦争状況と、そうでない日常とを区別しないともいえる。

たとえば、日本に来ているチャイニーズの大学教授による言論というのは、すべて中国共産党が勝つために日本人を騙すためのものであるし、個人的に訪日し日本人と親しくしているチャイニーズの中には工作員がいて、戦わずして日本が負けるように仕向けていくのである。もし実際、日中戦争になったら、日本は核戦争以外では絶対に勝つことはできるであろう。核についても今のところアメリカの抑止力が効いているし、あるいは日本も核武装するという選択肢があってもいい。

日本が核武装しないように、また防衛力を強化しないように働きかけている言論活動やマスコミも中国共産党の味方である。「安倍内閣打倒」と動いている連中の裏ではチャイナの金が動いているのではないだろうか。60年安保（闘争）のときにソ連が日本でどれだけの工作をしたかは、我々の記憶に新しい。NHKの中にだって中国中央電視台の支局があり、NHKはそれに洗脳されてしまっている。民放各局もチャイナに関係した内容の番組を制作するときには、中国共産党がバックの日本で作った会社を窓口として通さなければならない。中国共産党はすべてそうした情報コントールをしかけてくるのである。マスコミもすべて戦場だと

中国の日本に対する超限戦略 ④

いうことなのだ。

心理戦ともいえるこの「超限戦」は、孫子の兵法にある「戦わずして勝つ」という、相手の戦闘心をくじいてしまう方法である。現に台湾でも若い人たちに向けて、中国共産党は「戦争は怖いもの、戦争には行きたくないだろう。台湾が独立するといえば戦争になる」と呼びかけ、「平和がよければ、台湾の独立建国などを考えないことだ」と誘導しようとしている。これは、日本共産党などが掲げている「憲法9条真理教」と同じである。

毎日地上波のテレビが垂れ流し続けている情報は、日々人の心にミサイルを撃ち込んでいるようなもので、「日本は戦ってはいけない、戦わない国だ。白旗掲げて占領されたほうがマシだ」と徐々に日本人を洗脳しているのだ。もし占領されたらどうなるか。チベット人やウイグル人が体験している悲惨な現実を、日本のマスコミは伝えようとはしない。

◆チャイナのインドシナ半島支配と鉄道

筆者の尊敬する学者に樋泉克夫（ひいずみかつお）先生がいる。先生はチャイナウォッチャーで特に優れた華僑ウォッチャーでもある。その樋泉先生に「藤井さん、海ばかりみてちゃダメだよ」と言われたことがある。チャイナの東南アジア支配について話していたときのことである。

樋泉先生曰く、チャイナはランド・パワーであるから、地べた（ユーラシア大陸）ですぐヨーロッパと結びつくことができる。また陸路を通じてインドシナ半島を制覇しようとしている。その

際、最も有効な手段は鉄道だ。鉄道は高速・大量にモノとヒトを輸送することができる。モノが輸送できるということは、兵隊や戦車なども輸送できるわけだ。今から16年前の樋泉先生の著書の中で、すでに「気をつけなければならないのは、鉄道網によるチャイナのインドシナ支配、制覇である」と書き記されている。

実は、チャイナ南西部の雲南省は、現在も一番経済発展が遅れている地域で、1990年7月に北京で行われた「少数民族地域経済発展第8次5ヵ年計画と10年計画」なる政策会議で、雲南省あたりを発展させようということが話し合われた。

ではどのように発展させる計画かといえば、南西部は中央から見れば高い山などもあり奥地といえるような場所である。ここを無理やり上海などの都心部と結びつける必要はない。**むしろチャイナ南西部をインドシナ半島と結びつけ発展させる計画が発表されたのである。**実は大昔の国境もなにもない時代には、少数民族などはこのルートを年中往来していたわけで、インドシナ半島はチャイナの南西の出入り口ともいえる場所なのである。

第二次世界大戦の前から大戦中にかけて、この地域に「援蒋ルート」というものがあった。名前の由来の通り、四川省にいる「蒋介石を援助するためのルート」で、日本はこのルートのおかげで大変苦戦し、のちのち対米戦に引きずり込まれていく理由になる。**英米がこのルートで莫大な援助物資を四川省重慶の蒋介石に送っていたのである。**このルートは、イギリス支配下のビルマと四川省を結ぶ道だった。日本はこのルートを潰すことによって蒋介石を敗北させ、それによってチャイナ全体を平和にできると考えて、戦線を拡大していった。

中国が狙う、アジア戦略 ⑤

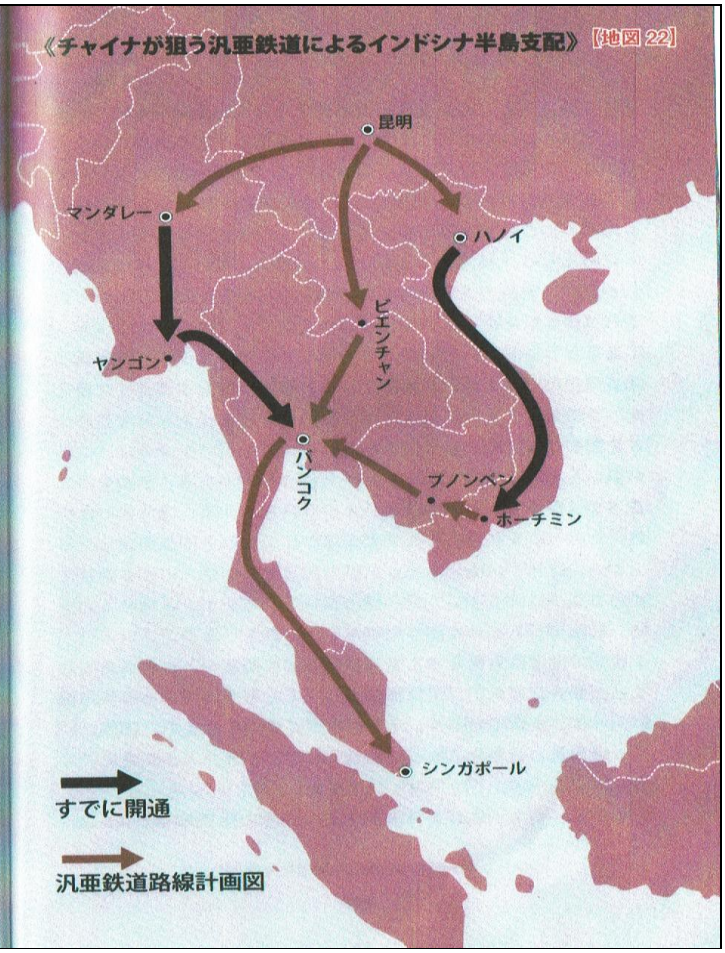
そもそも援蒋ルートはこの作戦のために新たに作られた輸送路ではなく（もちろんトラックなどの大きい貨物車が通る太い道はあとから作ったが）、もともと現地の少数民族や商人たちが行き来していた道であった。チャイナ南西部の発展計画も、普通の国が単に経済開放として行うならいいのだが、チャイナの場合はそういうわけにはいかない。

地政学の考え方の中に、「辺境は中心である」という発想がある。辺境から見てみれば新しい世界が見えてくる。辺境を新しい中心と考えて、インドシナ経済とチャイナ南西部を結びつけて、この貧しい地域を豊かにする方法を実現しようとしている。中国共産党はこれをインドシナ半島支配の道具の一つとして利用しようとしているのだ。

次ページの【地図 22】を参照して欲しい。この戦略の一番の根幹になるのが鉄道網なのである。チャイナは汎亜鉄道という鉄道ルートを、昆明からバンコクまで３つのルートで作ろうとしている。１つは昆明からミャンマーのマンダレー～ヤンゴンを通ってバンコクへ向かうルート、２つ目は昆明からヴィエンチャンを通してバンコクに向かうルート、３つ目はベトナムはハノイとホーチミンの間に鉄道が通っているので、昆明からハノイにつないで、ホーチミン市からプノンペンを経てバンコクへ向かうルート。バンコクで全部集結させて、最後はバンコクからシンガポールまで繋げる計画だ。この計画が実現すれば、中国共産党は、経済的にまずインドシナ半島を中華経済圏に取り入れておき、やがて政治的にも軍事的にも支配していく戦略である。

この３つのルートはすべて完成しているわけではないが、１つ

《チャイナが狙う汎亜鉄道によるインドシナ半島支配》【地図 22】



中国が進める、河川戦略 ⑥

向は次の文章に集約されている。

「東南アジアを経由してアジア・太平洋へ向かって進み、世界へ進出する。対外開放の末端を最前線に変化させる。（対外開放の一番遅れているところを最前線にするということ）これは雲南省が改革を進化させ経済発展を加速し、国民経済を新たな高い段階へ押し上げ続けようとする一つの重要な戦略思想だ。」

（樋泉克夫著『中国の宿命』三天書房　2000　p144）

ここにはっきりと中国共産党の戦略思想が述べられている。

◆チャイナによるインドシナ半島河川支配

中国共産党のインドシナ侵略戦略にはさらにもうひとつの秘策がある。これはずばり、河川の支配である。彼らは河川の水流を支配することにより、インドシナ半島を支配しようとしているのだ。

【地図 23】を見ていただきたい。インドシナ半島に流れている大きな４本の河川の源流は、チベットにある。４本の大河川とは、メコン川、チャオプラヤ川、サルウィン川、ホン川の４つである。チャオプラヤ川はかつてメナム川と呼ばれていた川で、上流でメコン川から分かれている。チベットの高い山が水源であり、ここから流れてくる４つの河川はすべて、チャイナの領土内を流れてインドシナ半島に流入する。本来、チャイナには源流はないわけであるが、残念ながら今日の国境では中華人民共和国内ということになってしまっている。つまりチベットを独立させることができれば、チャイナの河川支配は不可能になり、本当にこのあ

【地図 23】

《4本の大河川によるチャイナのインドシナ半島支配》